
ゆっくりと

石子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆっくりと

【Nコード】

N9030U

【作者名】

石子

【あらすじ】

夏休み。毎年、男友達と行く花火大会。今年は女子も誘うことになった。

日が沈んで暑さが少しマシになったけど、じっとしているだけでも汗ばんでくる。

「あちい」

つぶやいて汗を拭った。

花火が始まるまでにはまだ少し時間があるが屋台は賑わっているし、行き交う人達もいつもとは違う浮足立った雰囲気だ。

「女の子達、浴衣で来るって」

英輔がふと思い出したように言った。

「まじで！？　じゃあ、園田も浴衣で来るよな？」

「そうだと思うよ」。三人で美佳の家に集まって一緒に準備するって言ってたもん」

「そうかあ」

勇太郎はここに集合した時から何かと落ち着かない。いや。一週間程前に花火大会に園田達と一緒に行くことが決まってからずっとそわそわしてる。いやいや。もう昔から落ち着きのない奴ではあるんだけど。

「浴衣って暑そうだな」

どんな浴衣で来るかなあ、なんて言ってる勇太郎に水を差すわけじゃないけど、目の前を通り過ぎて行く浴衣姿の人達を見ると俺にはそんな感想しか出てこなかった。

「亮。お前、風情つてもんがないのか！？」

「あー。はいはい」

風情をお前に語られたくはないけどな。

「そうだ。後でかき氷食べようよ。有名なところがあるんだよ」

マイペースな英輔がのほほんと言う。なんとなく近くにあったかき氷の屋台に目がいった。ちょうど真つ青な色のシロップをかけたかき氷を客が受けとっているところを見て、急に食べたくなった。

「有名なところって？」

俺はかき氷屋を眺めながら聞く。

「えつとねえ、郵便局の隣くらいに毎年出てる屋台なんだけど……」

「遠いよ！」

「遠いよなあ」

英輔が言い終わらないうちに勇太郎が突っ込む。俺も思わず同意してしまった。

「えゝ。そうかなあ？ 歩いて十分くらいだよ。氷がスツゴくふわふわで口の中で一瞬でとけてね……」

「却下！。郵便局の方まで行くのめんどくせえよ。氷なんてその辺の屋台でいいって」

削ってシロップかけるだけなんだからどこのでもそう違いはないだろ。

俺の発言に勇太郎も隣で頷いてる。英輔はちよつと残念そうな顔だったがすぐに気を取り直したようだ。

「じゃあさあ、タコ焼きにしよう。その角曲がつたところにある店なんだけど、外がカリッとして中はもっちりだね、人気あるんだよ」

単純だけどそんなことを聞いたら今後はタコ焼きが食べなくなる。勇太郎もタコ焼きいいよな、なんて言ってるしやっぱり単純なんだろう。

それにしても英輔の奴、食べ物のことにはやたら詳しいんだよな。学校帰りになんか食おうって時も、どこの店がおいしいとかあのファーストフード店で新商品が出たとかいう英輔の情報を元に行き先を決める事が多い。

英輔に聞くと「美佳の影響だよ」なんて答えが返ってくる。

英輔が美佳と呼んでいる楠は確かに女子の中心にいるような奴で、

流行のものとかには敏感そうだ。家が近くて幼なじみらしい。

「今日さ、園田と楠ともうひとり女子来るんだよな？ ……誰だっけ？」

なんとなく会話が途切れたからか、勇太郎が聞いてきた。

「相澤だろ？ あいつら三人でいることが多いし」

「えー？ どんな子だっけ？」

こいつ、基本的に園田のことしか頭にないのか。

「どんなって……、お前なあ。クラス一緒だし。小柄で髪の毛肩につくくらいの長さで……。園田や楠に比べたら地味かもしんねえけど。ほら、球技大会とかの行事も何気に一生懸命がんばってた……」

思いつくままに相澤の特徴を並べてみる。

「ああ。言われてみれば確かに三人でいるとこ見かけたことあるかも」

ようやく思い当たったようだけど、そんなに興味はなさそうだ。

そもそも今日の花火大会は俺ら三人で行く予定だった。それが女子と一緒にいく事になったのは英輔が楠と幼なじみだったのと、その楠が園田と仲が良かったという繋がりから、勇太郎が英輔に頼んだのがきっかけだ。

俺が見る限りでは勇太郎は園田に相手にされてないように思うんだけど、でも機会をみては話し掛けたりしてる努力はフツーに尊敬する。

「亮がそんなによく見てるなんて意外だなあ」

……お前、園田のこと以外でもちよつとはまわり見るよな、と勇太郎に言っただろうかと思っただけ、英輔から掛けられた言葉に思わず動揺してしまった。

「は？ 別に相澤のことそんな見てるわけじゃねえよ」

「あれ？ 僕は相澤のことを言っただけじゃなくて、亮って女子に興

味なさそうなのになって意味だよ？」

しまった。

……じゃなくて。

「英輔の言い方がまぎらわしいんだよ。それにクラス一緒なんだから自然に目に入るだろ」

努めて落ち着いて俺は言った。もともとそんなに感情が出やすいタイプじゃない。一瞬動揺したのなんて気付かれないだろう。多分。「ふーん」

意味ありげに相づちを打つ英輔と目があつた。

そんなんじゃないよ、と心の中で呟きながら無言で目を逸らす。そうこうしているうちに、勇太郎が「あつ」と小さく声を出した。つられて顔をあげると三人の女子がこちらに向かって来るのが見えた。

「ごめんね、遅れて。浴衣着るのに時間かかっちゃって。どう？
かわいいでしょ？」

第一声でそう言い放つたのは、楠だ。遅れたことを素直に謝るのはいいとして、そのかわいいでしょアピールはどうなんだ？

でも英輔は慣れっこなようで、なんのためらいもなく言葉を返す。

「うん、かわいいね。美佳、ピンク似合うよねえ」

確かにピンクの少し派手にも思えるその浴衣は楠にはよく合っている。

「あんだ達は変わり映えしないわよね」

笑顔で楠は俺ら三人を一切りした。褒めてもらつときながら、その返しはどうなんだ？

そう思ったが、確かに三人ともＴシャツに半パンという変わり映えのない格好をしていることに気付いて黙っておくことにした。

でも勇太郎なんかは特に、何着るか結構迷つてたのにな。ちよっ

と気の毒だな……。

と勇太郎の方に目をやると、いつの間にか楠の後ろにいた園田の
ところに行って話し掛けていた。

はやっ。

いつの間に移動した？

浴衣似合ってるな、とか夏休みの宿題進んでるかとか勇太郎が話
し掛けて、それに園田が言葉少なに応えてる感じ。

園田は別に無口ではないし意見があればかなりはつきり言うが、
そんなにおしゃべりな奴ではない。でもこちらが話し掛けたことに
はきちんと対応してくれるし、話を聞くのがうまい。……と、勇太
郎が前に俺や英輔に語っていた。そこが良いらしい。

白地に青い花柄の浴衣は園田らしい気がする。

そしてもう一人。

「相澤の浴衣、渋いねえ」

楠に隠れるような位置に立っていた彼女にそう言ったのは英輔だ。
「うん。おばあちゃんにもらった浴衣なんだ。……変かな？」

相澤は、ハニカミながら尋ねる。ホントは相澤もピンクとかかわ
い感じのを着てくるかと思っていたが、紺地に白で描かれたレト
口なその柄は意外に似合っている。

「全然変じゃないよ」。いつもと雰囲気違うなあって思っただけ。
「すごくかわいいよ。ね、亮？」

「え……。ああ……。うん」

不意打ちで英輔に話の先を振られて微妙な相槌で返してしまった。
それでも相澤は、

「ありがとう」

と俺と英輔に笑顔で言った。

いよいよ花火の始まる時間が迫ってきて、メイン会場であるこの

広場もたくさんの人でごった返している。正直、こんな田舎のここにこれだけの人がいたのか不思議なくらいだ。

さっきの集場所からは普段ならほんの五、六分の距離だけど、人が多いのと屋台をのぞきながら歩いてきたので結構時間が経ってしまった。

「菜津実^{なつみ}。琴^{こと}がないんだけど」

後ろから楠が園田に呼びかけた。それを聞いて、俺もつられて振り向く。

俺と勇太郎と園田が前を歩き、英輔と楠、相澤が後ろを歩いていったはずだ。

ちなみに、明らかに俺邪魔じゃないか、と思いながらも勇太郎と園田の間を陣取って歩いていたのは勇太郎が園田とずっと二人でしゃべるの緊張するからと言って俺を挟んで園田と会話をしてたからだ。後ろの三人の様子はあんまり把握してなかった。

楠は園田に呼びかけてからもさらに周りを見回して相澤を探しているようだ。

「いつから見当たらないの？」

落ち着いた声で園田が問い掛ける。

「ついさっきまで一緒に話してたんだけどなあ。はぐれちゃったみたいだね」

英輔もキョロキョロと辺りを見回している。

しかし人が多くて少し先も見通せない状況だ。特に相澤は小柄だから埋もれてしまっているのかもしれない。

「都賀崎^{つがさき}、あんた探してきてよ。なんか、携帯繋がりにくいみたいで連絡つかないわ」

楠が携帯を耳に押し当てながら俺に向かって言った。というか、それ命令だよな……？

「なんで俺？」

「だって、みんなで探しに行ってもしょうがないじゃない」

「えっと。だから、なんで俺？」

「琴が心配じゃないの？ 変な男とかに連れてかれてたらどうすんのよ」

楠が相澤のことを心配していることはわかったが、しつこいようだがなんで俺が名指しで命令されたんだろな……？

「ほら、都賀崎ってこういう時頼りになりそうだし」

心を読まれたとは思えないタイミングでにっこりと取って付けたような理由を言われてしまった。でもこれは、どう考えてもつべこべ言わずに行って来いって意味だよな。

英輔と勇太郎はあまり関わらない方がいいと判断したのか微妙に視線が合わないし。園田は楠の言う事に異論なしって感じだし。

「わかった。探してくる」

逆らわない方が賢明だろう。探しに行くのがそんなに嫌なわけじゃないし。

「あっちの方に空いてる場所ありそうだから先に行つとくね」

英輔が少し先を指差して俺にそう言ってるのを見て軽くうなずくと、来た道を戻る。

さっきはぐれたばかりだって言ってたし、そんな遠くに行っちゃったってことはないだろう。多分、すぐに見つかるんじゃないだろうか。

ドン

腹に響く音と共に、歓声があがる。

また花火が上がった。

なんだかんだで小さい頃から毎年この花火大会は欠かさず見に来ている。小さい頃は親に連れられて来ていたし、ここ何年かは勇太郎と英輔と三人で花火を見るのが恒例になっていた。

そして今年は、図らずも女子と二人で花火を見ることになった。

「わぁ。花火、綺麗だね」

「おお」

相澤は花火が上がるたびに、小さく歓声をあげて嬉しそうにしている。

相澤を探していた俺だったが、どんどん道を戻って最初に落ち合った場所の付近まで来た。そういえば俺、相澤の携帯番号もメモも知らないし連絡とれねえじゃねえか。どこかで行き違って、相澤はみんなと合流してる頃かもしれない。そう思って英輔にでも電話しようとした時に、相澤を見つけた。

なんでも、すれ違った人が落としたハンカチを拾って渡そうとしたが気付いてもらえず、追いかけたところ、かなりの距離を戻ってしまったんだという。すっげえお人よしだな。

「それにしても、ごめんね。わざわざ探しに来てもらっちゃって」
花火が途切れた合間に、相澤は何度目かの謝罪を口にした。

「別にいいって。探したって言うても大したことしてないし」

うん、ホントに歩いて道を戻ってきただけだ。

「ううん。私、いつも津賀崎君に迷惑かけてない？ ほら、この前も私が運ぶって引き受けたゴミ袋と一緒に持ってもらっちゃったし……」

「そうだったか？」

そりゃ、同じクラスで同じ美化委員で大掃除で出た大きいゴミ袋捨てに行くのに女子を一人で行かせるわけにいかないだろフツー。

「うん。都賀崎君はいつもやさしいよ」

そう、相澤がつぶやくように言った気がしたが、再び上がった花火の音でよく聞き取れなかった。自分の都合の良いように聞こえただけかもしれない。相澤の方を盗み見たが、彼女は花火の方を見上げている。

花火は次々と空ではじける。なんだか、ドキドキした。

無意識にポケットに手を入れると同時に携帯が振動してメールが来たことを報せる。

勇太郎からだ。

さつき英輔に電話したばかりなのに。人が多くて広場まで戻るのが大変だから、適当に場所を見つけて相澤と花火見とくつて。相澤も何度か楠や園田に電話を掛けようとしていたようだが、電波の問題なのか繋がらないようだったし。

『花火終わったら橋のところに集合！』

それだけの文面。この辺で橋と言えば一つしかない。人の流れからも少し外れた場所だし、落ち合うにはちょうどいいだろう。

そんなことより、時間を見るともうそろそろ花火が終わる頃だということに気付いた。そんなに時間が経ってたなんて驚きだ。

じゃあ、今連続で打ちあがっている花火はフィナーレって感じだろうか。そう思うとちょっとだけ名残惜しくなった。

俺と相澤がいる場所はメインの広場からは少し離れているが、それでも花火が終了したというアナウンスはよく聞こえてきた。それなりに花火が見える場所なので、広場ほどではないが結構混雑しているところだ。

「終わっちゃったね。すっごくきれいだったー」

満足そうに相澤が言う。

「そうだな。じゃ、他の奴らと合流するか」

言って、先に立って歩き始める。目の端で、相澤がついてくるのを確認しながら。……と、不意に手をにぎられた感触があった。

えっと……。

「あ……あのね。またはぐれると、迷惑かなって思っ。ちよっとの間だけ……」

相澤を振り向いたが、彼女は俯いていて目を合わせようとはしなかった。

「おう」

一言だけ答えて、そのまま手を引いて歩く。妙にぎこちない歩き

方をしている気がする。そして無言だった。しゃべるとこの時間が終わってしまうような気がして、無言で人込みの中を歩いた。

しばらく歩いたところで、相澤が小さく「あ……」と言うのが聞こえた気がして、彼女の方を見る。相澤の視線をたどってみると、遠くに楠たちがいるのがチラッと見えた。当然、相澤は繋いでいる手を離そうと力を緩めるのが感じられた。

俺は、離れかけた手を、ぐっと握り直す。

驚いたように俺のほうを見る相澤。手を繋いだ状態で、はじめて目が合った。

「相澤、かき氷食べたくないか？」

大丈夫。まだあいつらは俺らがここにいないこと気付いてない。

「え？ かき氷？」

「ああ。郵便局の近くにある屋台のがうまいんだって」

大丈夫。俺があいつらに気付いたことは相澤には気付かれていない。

「うん。でも……」

相澤が皆のほうに視線を戻そうとするのを引き止めるように続けて言った。

「この人込みだとあいつら見つけるのも大変だろうしさ、二人で行かねえか？ ほら、それに合流してからだと、ちょっと遠いし行くのめんどくさいとか言う奴いたら行き辛いだろ」

どこかで聞いたような話を一気にまくし立てた。この際気にしてられない。

大丈夫。実はまだ橋で待ち合わせっていうメールが来てたこと相澤には言っていなかった。

「うん。そうだね。私もかき氷食べたい」
よしっ。

相澤は少し迷ったようだが、すぐに笑顔でそう言ってくれた。
「おう」

ただ、もう少し相澤と話したかった。まだ手を離したくなかった。

相澤もちよつとはそんな風に思ってるだろうか？
かき氷屋までは十分くらい。ゆっくりと、歩くことにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9030u/>

ゆっくりと

2011年7月16日03時16分発行